

〔論 文〕

地域史を活用した地域づくりにおける愛着の生成と ミュージアムの役割

——「鉄道のまち新津」を事例として——

和 泉 大 樹

I はじめに

近年、大都市圏への人口集中・少子高齢化などが進行する中で、地域によっては、その維持が問題となっている所がある。その解決策の1つとして、地域が持つその地オリジナルの歴史や文化をフィーチャーし、正しいdesign(創意工夫)を付すことにより魅力的な観光資源として創造・育成・活用することが有効ではないかと考えられている。

かつて筆者は、観光というコンテキストにおけるミュージアムについて、「博物館は、観光資源の発掘や他の産業との連関、経済振興などを意識した展開を顕著に思考するわけではなからうし、このことは、博物館の第一義的な役割ではない。資料の収集・保管、展示、調査研究をベースとした資料、歴史、文化などの次世代への伝達、教育活動の推進や教養力の向上、趣味・娯楽への寄与などが、社会情勢などとは無関係に遂行される博物館の第一義的な役割である」¹⁾ということを前提としながら、「観光による地域の振興が経済に一辺倒となり、地域や歴史・文化の単なる商品化や形骸化などの影響が生じるという可能性もあろう。このような事態に陥らないよう、博物館には、地域の歴史・文化などの観光資源化のプロセスやその活用に関わり、偏重的な思考・実践とならないようにバランスやストッパーの役割を担うことが求められるであろう。そもそも、地域資源はそのままでは観光資源として成立し得ない。観光資源は、地域資源に地域の創意工夫を加えて、魅

力ある観光資源(観光対象)として育て上げられるものなのである。したがって、博物館は、この「地域の創意工夫」に積極的に関わりをもつべきであると考えられる」²⁾とミュージアムが観光振興という「地域の維持」の解決策の1つに有効に機能する可能性について言及している。

このような自身の研究を少しずつ進めるべく、本稿では、地域史を活用して地域づくりを実践するアクターは、どのような地域の在り方に地域への愛着を見出すのかについて考察をめぐらせてみたい。また、地域史を活用した地域づくりに、地域のミュージアムがどのような役割をもって関われる可能性があるのかについて考えてみたい。

以上を論じるにあたり、本稿では新潟県新潟市秋葉区に所在する「にいつ鉄道商店街」³⁾における取り組みを事例として取り上げる。当該事例は、信越本線・羽越本線・磐越西線の交わる地として、明治時代から鉄道のまちとして繁栄・展開してきたという地域にオリジナルな歴史的背景を活かして、商店街に、地域に、賑わいを取り戻そうという取り組み事例であるが、この取り組みには、新潟市新津鉄道資料館というミュージアムが関わっており、自身の研究目的に該当するためである。

以下、本稿と関係する先学諸氏による研究を整理することからはじめ、このことを踏まえて、現地における実見調査・ヒアリング調査をもとにして、アクターが愛着を見出す地域の在り方や地域づくりにおけるミュージアムの役割について論じることとする。

II 先行研究

新潟市新津鉄道資料館と新津商店街に関する研究には、以下のような論考が蓄積されている。

金山喜昭氏は、博物館学の観点から平成25年(2013)「新潟市新津鉄道資料館を再生する」⁴⁾と平成28年(2016)「鉄道資料館と商店街の連携とその波及効果：新潟市新津鉄道資料館と新津商店街の事例から」⁵⁾と題された2本の論考を発表している。金山喜昭氏は、平成22年(2010)から、新潟市美術館の評価及び改革に関する委員会、新潟市文化施設のあり方アドバイザー、また、新津鉄道資料館活性化検討委員会委員、新津鉄道資料館活性化基本計画策定委員会座長などを歴任されている。前者の論考では、新潟市新津鉄道資料館の再生に関する一連のプロセスを振り返りながらその意義などについて論じたものである。論考中、「資料館の再生が地域経済にも少なからず影響を及ぼす。そのために「鉄道のまち新津」であるという根拠を示すことが大切である。資料館を再生させることは、その根拠を内外にアピールすることになる」⁶⁾と論じている点は、地域が持つその地オリジナルの歴史や文化にフィーチャーする観光地域づくりの観点からは、注目に値する。後者の論考では、関係者への詳細なヒアリング調査などをベースとして、平成26年(2014)に新潟市新津鉄道資料館がリニューアル・オープンしたことにより、「資料館と地元商店街の連携のあり方や、そのことは商店街にどのような変化をもたらしているのか、また、商店街という地域コミュニティに、どのような影響を及ぼしているのか」⁷⁾についてまとめられたものである。論考中、地域コミュニティの成長・人材育成・交流人口の拡大・外部発信などの点でコミュニティが進化していることに触れながら、「双方が〈思い〉を同じくして行った連携の成果は、両者にとってそれぞれ「得るもの」がなければならない。資料館と商店街は双方にとって、「WIN WIN (ウィンウィン) の関係」になることが大き

なポイントである」⁸⁾と、ミュージアムが地域と連携する際の留意点などを示している。

新潟市新津鉄道資料館の前副館長であった水澤喜代志氏は、平成29年(2017)「新津鉄道資料館リニューアルとまちなか活性化を結びつける」⁹⁾という論考を発表している。論考中、資料館のリニューアル・コンテンツを披露しながら、「資料館が「鉄道の街にいつ」の中心施設になることで地域への誘客につながっていくと考えようになった」¹⁰⁾とミュージアムが所在エリアの集客に貢献可能であるとの考え方を示している。また、新潟市新津鉄道資料館と商店街との連携について、事業のコンテンツをあげながら、連携が進展している様を論じている。

III 新潟県新潟市秋葉区の概要

ここでは、本稿が研究の対象とするにいつ鉄道商店街・新潟市新津鉄道資料館の所在する新潟県新潟市秋葉区の概要について記述する¹¹⁾。

新潟県の県庁所在地である新潟市には、北区・東区・中央区・江南区・秋葉区・南区・西区・西蒲区の8区が配されているが、秋葉区はそのうちの1つで、新潟市の南東隅に位置し、新潟市江南区・南区・阿賀野市・五泉市・南蒲原郡田上町と隣接する。面積は95.38km²、人口は77,509人(平成29年(2017)3月末現在)を数える。秋葉区は西側を流れる信濃川と東側を流れる阿賀野川に挟まれて所在し、南側には標高248mを測る菩提寺山などのある山間丘陵を有する。

秋葉区の中心地である新津は、JR信越本線・羽越本線・磐越西線の交わる地であり、日本海側の鉄道の要地として今日まで発展を遂げ、鉄道のまち新津として広く知られている。また、石油の採掘地としても著名で、「日本の石油王」として知られる中野貫一の邸宅・庭園や戦後の日本文学界を牽引した坂口安吾の墓所などがある。近年、花木・球根の生産地としても名高いが、とりわけ、アザレアの生産量は秋葉区を中心とする信濃川下流域が全国一である。

Ⅳ にいつ鉄道商店街の取り組み

ここでは、商店街の概要や主たる取り組みを概観し、その取り組みの中心となって活動している商店街の関係者2名へのヒアリング調査について記すこととする¹²⁾。

1. 商店街の概要

明治30年(1897)に、北越本線の開通に合わせて新津駅が誕生して以来、複数の路線の交差点である新津駅は重要拠点となった。明治40年代はここから石油が運ばれ、昭和10年代には新潟港が中国への輸送基地となったことから鉄道施設が新津につくられ、町は活況を呈した。また、太平洋戦争下には軍隊の乗換駅として、戦後は北海道の石炭の輸送に関連して新津駅は利用された。以上のような鉄道利用の展開とともに新津は「旅館業、食堂、弁当販売、お土産販売、生活用品、運送業など駅に関連するさまざまな商売」¹³⁾が発展した。

上記のように、明治時代に遡る鉄道を中心とする地域の歴史的な背景のもとに、新津の商店街は成立・展開した。新津駅前には、新津駅前商店街・新光商店街・にいつ0番線商店街(旧新津中央商店街)・大橋通り商店街・二福商店街・新町商店街が所在し¹⁴⁾、買回品小売店、最寄品小売店、飲食店、サービス店などの生活必需品を扱う店舗をはじめ、金融機関や医療機関なども所在する「近隣住民には欠かせない地域型商店街」¹⁵⁾として利用されてきた。

これら新津駅前における商店街においても、各地の商店街で認められる、人口減少やショッピングモールなどの大型店との競合による利用者の減少、後継者不足、空き店舗の増加などの課題が見られる。そこで、この現況に立ち向かうべく、新津はかつて「西の米原、東の新津」と呼ばれた鉄道のまちである。鉄道の発展とともに繁栄したまちであるという地域の歴史性に目を向け、「鉄道」を活かした地域づくりを進めていくこととなった。すなわち、ここにショッピングモールなどの大型店や他地域の商店街とは

異なるファクターを見出し、地域オリジナルにこだわり、賑わいの創出への取り組みを進めていくのである。なお、この取り組みは、中小企業庁の「がんばる商店街30選(2015)」の選定を受けている。

2. にいつ鉄道商店街の取り組み

ここでは、にいつ鉄道商店街の鉄道を活かした地域づくりの取り組みコンテンツのいくつかを概観する¹⁶⁾。

なお、にいつ鉄道商店街は、新潟商店街協同組合連合会の非会員であっても鉄道を活かした地域づくりの趣旨に賛同すれば参画が可能な超党派的な商店街の集まりである¹⁷⁾。

□取り組み①【写真1】

「C57形式149号機第一動輪を商店街に展示」

新潟県信用組合新津支店の店舗前敷地には、国鉄時代に活躍したC57形蒸気機関車149号の動輪が屋外展示されている。当該蒸気機関車の動輪は、昭和15年(1940)から昭和49年(1974)の35年間で、3,089,345.7km、地球約77周の距離を走行した。重さ2,720kg、直径は175cmを測る¹⁸⁾。

なお、当該蒸気機関車の動輪の設置については、新光商店街から新潟市新津鉄道資料館に鉄道のモニュメントになるものを商店街にも展示したいという要望によるもので、運搬・設置などにかかった費用80万円については、商店街連合会が1/3を負担し、2/3を市からの商店街活性化補助金を充当して執行された¹⁹⁾。設置場所については、新潟県信用組合新津支店により無償提供がなされた。

□取り組み②【写真1】

「踏切警報機を商店街に展示」

上記のC57形式149号機第一動輪と同様に、にいつ0番線商店街(旧新津中央商店街)から新潟市新津鉄道資料館へ鉄道のモニュメントになるものをうちの商店街にも展示したいという要望によるものである。この踏切警報機は警報装置・警標・警報灯を備えた閃光式警報機で、

イベントなどでは実際に「カーン・カーン・カーン」と音が鳴り、人々を驚かせ、喜ばせるという。踏切警報機は、三村歯科医院の前に設置されているが、場所については無償提供がなされている。また、移設については商店街関係者の商売の専門性を活かした尽力により、安価に実施できたそうである。

□取り組み③

「個人所有の鉄道関連資料の展示」

店舗内に個人所有の鉄道関連資料を展示している店舗がある。取り組み①「C57形式149号機第一動輪を商店街に展示」・取り組み②「踏切警報機を商店街に展示」と合わせて「まちなか鉄道資料館」と位置付けられている²⁰⁾。

□取り組み④

「旧国鉄色のアーケード塗装」

にいつ0番線商店街(旧新津中央商店街)のアーケードが旧国鉄時代の特急を想起させる赤色とクリーム色カラー配色されている。かつて、上野・新潟間を走行していた特急「とき」がイメージされている。

□取り組み⑤【写真1】

「列車停止位置標識の吊り下げ」

特急停車駅のホームに設置されている号車番号を標示した列車停止位置標識が吊り下げられている店舗を見ることができる。

□取り組み⑥【写真1】

「鉄道シャッターアート」

シャッターに鉄道車両が描かれている店舗を見ることができる。「新光商店街の薬局の店主が店舗のシャッターに鉄道車両を描くことを発案した。新潟市内のアマチュア画家が描いた下絵をシャッターに転写したものを、ボランティアがペンキで彩色」²¹⁾した。なお、このボランティアには鉄道ファンや新潟薬科大学の学生などが参加したという。新津を紹介する冊子には塗装店の方の「A4の製図を5mに拡大する下

絵づくりがそれはもう！大変でした(笑)」²²⁾というコメントがイラストとともに記されている。たった数行のコメントではあるが、地域の方々がしんどいながらも労力を惜しまずに楽しんで参画している様が窺える。

□取り組み⑦【写真1】

「0番線待合室「来て基地(きてきち)の設置」」

商店街の拠点・情報発信基地である。アーケードに流れる有線放送局としても機能しており、駅員風のアナウンスや店舗情報などを放送している。

また、新津第一小学校の児童が「一小情報ボックス」として活動している。「一小情報ボックス」は、毎週水曜日に、「児童が学校情報を商店街のお客様に生放送する活動です。校区の0番線商店街に「来て基地放送局」ができたのがきっかけで平成27年より開始。地元商店街の全面的協力を受けて実施中。毎週水曜、給食を済ませたら、当番の委員会やグループが引率の先生と一緒に放送局に徒歩で向かいます。アナウンサーさんが原稿以外の質問もするのでとてもドキドキします。収録したものを、後日給食の時間に全校で楽しく聞いています」²³⁾という活動である。また、この放送は毎週土曜日にFM新津でも再放送されている。

なお、0番線とは、平成13年(2001)まで新津駅に実際に存在したホームであるが駅改築に伴い廃止されたため、この新津中央商店街で残そう、伝えようと商店街の名称を「0番線商店街」に変更した。

□取り組み⑧【写真1】

「店舗案内・資料館誘導看板の設置」

ごりやく通り沿い(新町商店街)には、駅名標よろしく店舗の看板が設置されている。また、新潟市新津鉄道資料館の誘導もなされている。

□取り組み⑨【写真1】

「グッズ開発・飲食メニューの開発」

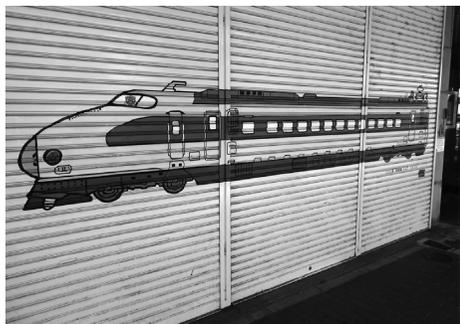


写真1

左列上から「C57形式149号機第一動輪を商店街に展示」・「鉄道シャッターアート」・「列車停止位置標識の吊り下げ」・「グッズ開発・販売(むらき呉服店内)」
右列上から「踏切警報機を商店街に展示」・「0番線待合室「来て基地」」・「店舗案内」・「資料館誘導看板の設置」

(筆者撮影)

グッズ開発・飲食メニューの開発も行われている。野本時計店の「新幹線の時計」、むらき呉服店の「SLと新幹線のでぬぐい」、フルーツ&ギフトやまいしの「カーブを曲がる新幹線のバナナ」、お菓子のオーサカヤの「銘菓くろがねの道」、パンアベQの「きてきちパン」・「SLパン」、コダカメラの「きてきちせんべい」、加藤茶舗の「昔なつかしいポリ容器のお茶」、クチーナ・デル・オテントの「SLピッツァ」、榊形屋の「C57定食」など、枚挙にいとまがない²⁴⁾。

□取り組み⑩

「各種冊子・パンフレット類の発行」

商店街に関する冊子やパンフレットなどが数多く発行されている。『鉄道の街新津 調査報告書』では「女子旅編」が発行されるなど²⁵⁾、ターゲットを意識して編まれているものも見られ、顕著に来訪者を意識している様が認められる。

□取り組み⑪

「鉄道モチーフの電話ボックス」

商店街の直接的な取り組みではないが駅前の公衆電話ボックスにはパンタグラフがデザインされている。

3. ヒアリング調査から抽出される思考

新津商店街協同組合連合会で理事長を務められており、また、自身では時計店を営まれている野本一郎氏にお話を伺った。

質問：なぜ、鉄道をテーマにしたのか？

野本氏：新潟市新津鉄道資料館のリニューアルがきっかけ。リニューアルに携わっていた水澤喜代志氏と鉄道商店街みたいなのがつくれたら面白いね。何をやっても鉄道につながるものをやろうとした。

質問：観光への意識はありますか？

野本氏：当時はなかった。あくまでも商店街の

活性化だった。少しずつ活動に進展が見られる現在は、観光への意識がある。宿泊施設がないことが地域の課題であると認識している。

質問：商店街とミュージアムとの関係は？

野本氏：グッズ販売などで連携している。このような関係性を密にしていきたい。

質問：ミュージアムに期待することなどは？

野本氏：資料館まで少し距離があるのが気になる。もう少し駅の近くにあって、各所に回遊するような資料館になれば、商店街も一翼を担うことができるのではないかと。また、京都鉄道博物館や埼玉鉄道博物館のようにJRともさらに連携を密にしたい。山手線などの鉄道車両を製造する東日本旅客鉄道株式会社出資のメーカーである株式会社総合車両製作所の事業所が新津にも所在する。新潟市新津鉄道資料館などと連携して鉄道イベントなどを開催しているが、このような連携にも期待している。

むらき呉服店の村木政寛氏にお話を伺った。

質問：取り組みにより商店街への来訪者も増えているがどう思うか？

村木氏：観光振興が進んでも鉄道グッズは売れるかもしれないが、呉服店の着物が、時計店の時計が売れるわけではない。しかし、良いことがたくさんある。

例えば、新津第一小学校の児童による毎週水曜日の「一小情報ボックス」によるアーケード放送では、「来週、文化祭があります」など、学校の旬な情報が子どもたちの声でまちじゅうに流れる。高齢の方々も喜んでいる。また、その放送の際には、フルーツ&ギフトやまいしの石月勝氏らが、児童にフルーツの差し入れをするが、そのことを児童は「今日、商店街でフルーツをもらったよ」と家庭で話す。つまり、商店



写真2「TRAIN SUITE 四季島」のお出迎え
(筆者撮影)

街が家庭での話題の1つとなる。また、木曜日にはクルーズトレインである「四季島」が新津駅に到着するが、その際、地域の複数の保育園が交代で「四季島」に乗車しているお客様をお出迎えする【写真2】。新津駅の駅長さんからは「子どもたちはJRの準社員だ」と喜ばれている。地域に鉄道という横串がぐさっとささったようなものである。

過去に「プチヴェール」という野菜(ケールと芽キャベツの交配によって誕生した野菜である。栄養価がとても高く野菜ジュースなどの材料に利用されたりする)²⁶⁾で地域づくりを仕掛けたことがある。例えば、ラーメン屋さんがラーメンに「プチヴェール」を散らすなどした。しかし、鉄道のように上手くはいかなかった。新しくできたものだから上手くいかなかったと思う。この地域では、遡るとすべてが明治30年(1897)の新津駅開業に行き着く。

質問：鉄道を活かした地域づくりにどのような想いがあるか？

村木氏：鉄道は人とつながるご縁をいただくキーワードであると思う。

以上、にいつ鉄道商店街の取り組みにおけるキーパーソンともいえる野本氏と村木氏にお話を伺った。両者とも鉄道に、商店街に、愛着を抱き、「鉄道」をキーワードとした活動に積極的

に取り組まれている方々である。

全体を総括する立場にある野本氏には地域づくりのテーマに鉄道を選んだ理由やミュージアムについての質問を中心にヒアリングを行ったが、地域づくりのテーマを選ぶきっかけは、ミュージアムのリニューアルであった。また、当時の副館長である水澤喜代志氏とのやりとりが見られた。また、今後、例えばJRとの連携など、ミュージアムに枝葉を広げる役割を担うことを期待していることが確認できた。

概して、ミュージアムに方向性の決定や展開の拡大などを期待されていた。

てぬぐいなどのグッズ開発・販売や「まちなか鉄道資料館」における「個人所有の鉄道関連資料の展示」など、積極的に取り組みを実践されている村木氏には、実践を進める中でどのようなことを感じておられるのかについての質問を中心にヒアリングを行ったが、その際の「鉄道という横串をぐさっとさしたようなものである」という言葉が印象的であった。後に「鉄道という横串をぐさっとさしたようなものとは、鉄道によって人や組織につながったという意味ですか」と伺ったら「そうです」とお答えになった。このことは、愛着生成を思考する上で注目すべきであると考えられる。

V 新潟市新津鉄道資料館の取り組み

ここでは、新潟市新津鉄道資料館の概要を確認するとともに、地域との連携を視野に入れた展開に関わる資料館の関係者3名へのヒアリング調査について記すこととする²⁷⁾。

1. 新潟市新津鉄道資料館の概要

昭和58年(1983)に、地域の旧国鉄職員や鉄道愛好家などによる地域の鉄道文化への想いのもと、新津駅の南西に新潟市鉄道資料館が開館した。その後、平成10年(1998)に旧国鉄時代の職員研修所があった現在の位置に移転し、平成17年(2005)には新潟市との合併により新潟市新津鉄道資料館に改名された。そして、平成



写真3 新潟市新津鉄道資料館
(筆者撮影)

26年(2014)にはリニューアルオープンし、「200系新幹線K47編成先頭車両」と「C57形蒸気機関車19号機」の実物車両の屋外展示なども加わった。その後も「485系特急形電車」・「DD14形ディーゼル機関車」・「115系近郊形電車」・「E4系新幹線P1編成8号車車両」・「GA-100形式新幹線確認車」と実物車両の屋外展示は拡大された。また、乗車が可能なミニSLコーナーもある。これらのこともあってか、平成26年(2014)の入館者数は前年の15,431人から46,937人への飛躍的増加を遂げた。以降、平成27年度(49,616人)・平成28年度(55,927人)・平成29年度(67,620人)・平成30年度(60,107人)と概して増加傾向にある。屋内では、1階には常設展示、2階には企画展示・キッズスペースなどを配する。常設展示では、鉄道資料約800点を展示し、新潟・新津の鉄道の歴史などの理解を促す。また、運転手の気分を味わうことができるシュミレーターも配置する。

2. ヒアリング調査から抽出される思考

新潟市新津鉄道資料館副館長の加藤裕之氏・学芸員の岩野邦康氏にお話を伺った。

質問：観光への意識はありますか？

岩野氏：観光への意識はある。ただ、鉄道史を扱う・見せる・学ぶという点も重要であり単なる観光施設ではないと考えている。インバウンドへの意識もある。近隣の咲花温泉・岩室温泉・月岡温泉へは資料館のパンフレットを置いていますが、行き先を決定していない観光者に有効に機能している。次の展開としてはビジネスホテルにもパンフレットを置きたいと考えている。

質問：ミュージアムと商店街との関係は？

岩野氏：平成26年(2014)の資料館のリニューアルの際に地域との連携を顕著に意識しはじめた。資料館が地域づくりに鉄道を活用するきっかけを提供した。鉄道を強調したのは資料館である。

質問：地域に期待すること・課題などは？

加藤氏：まちの人たちも含めて鉄道のまちという意識を持つことが、資料館にとっても商店街にとっても、持続可能性を考える上で必要であると思う。

また、新潟市新津鉄道資料館前副館長の水澤喜代志氏にお話を伺った。

質問：観光への意識はありますか？

水澤氏：当初からかなり意識していた。経済的な視点がないと持続的な展開は難しい。きっかけは野本氏の「自分の商売もあるのに、リターンがないと地域づくりなどはできない」という一言である。

Mar. 2020 地域史を活用した地域づくりにおける愛着の生成とミュージアムの役割

質問：ミュージアムと商店街との関係は？

水澤氏：当初は市役所と商店街の関係は良くはなかった。ほとんど関係はなかった。最初は大変だった。鉄道資料館のリニューアルの前年にいつ鉄道商店街というイベントを行った。このイベントは、資料館の収蔵資料を各店舗に展示するというもので、資料破損などの観点から、資料館側からものすごい反対があった。しかし、開催してみると、1週間で3,000名という来訪者を数えた。これはいけるのではないかと商店街は思ったのではないかと。以降、商店街と一緒に進めていくことにした。

資料館は単体で人を呼ぶのは限界があると思う。エリアで人を呼び込む必要がある。資料館に人を呼び込むのは手段、商店街などの経済的活性化が目的である。行政は、何のためにこの地域にこの施設を置いたのかをもう少し広い視野で見ても良いのではないと思う。このような観点から、リニューアルの絶対条件は地域との連携であった。

質問：地域に期待すること・課題などは？

水澤氏：これまで特徴のなかったまちに、特徴ができたと思う。経済効果も生じていると思う。近年は来訪者がSNSで発信してくれる。商店街にはソフトの部分を作って欲しい。来訪者に誰もが話しかける「おせっかいのまち」にして欲しい。後継者問題や商店街組織の温度差の問題などがある。

以上、新潟市新津鉄道資料館副館長の加藤裕之氏・学芸員の岩野邦康氏、前副館長の水澤喜代志氏にお話を伺った。3者ともにミュージアムの立場から商店街へ、地域へ眼差しを向けた方々である。

概して、ミュージアムは地域づくりのきっかけを提供・強調し、商店街の方々の自信へとつなげている。また、エリアへの眼差しも顕著であるとともに、持続可能性という観点から、ま

ちの人たちにも同じ意識が必要であると考えていることが窺えた。

VI まとめ

以上、本稿と関係する先学諸氏による研究を整理することからはじめ、いつ鉄道商店街と新潟市新津鉄道資料館における実見調査・ヒアリング調査について論じた。

ここで、アクターが愛着を見出す地域の在り方や地域づくりにおけるミュージアムの役割について考察し、まとめとする。

①地域史を活用して地域づくりを実践するアクターは、どのような地域の在り方に地域への愛着を見出すのかについては、商店街関係者であるむらき呉服店の村木氏の回答が参考になる。

村木氏は、鉄道を活かした取り組みにより、保育園・小学生児童・学校・高齢者・事業者・駅・行政など、地域の人や組織がつながることを「鉄道という横串がぐさっとささったようなもの」と表現する。また、「プチヴェール」という新津の特産野菜により地域づくりを仕掛けて上手く行かなかった要因を「新しくできたものだから」と分析する。このことは、一部の農業関係者などには身近なものであるが、地域の多くの方々には馴染みがないという意であると考えられる。

以上のように、「人・組織とのつながり」を評価する点、「プチヴェール」とは異なり、「地域の出発点であり馴染みのある存在である鉄道が成功の要因」と評価する点の2つの点から勘案すれば、「つながりやコミュニティの一員であることへの自覚」と「その要因をしっかりと理解できる眼差し」が「自分以外にも多く存在する」という地域の在り方に、心地良さ、すなわち、愛着を見出しているのではないだろうか。そして、そのきっかけを「鉄道」や「鉄道のまち」が提供したのではないだろうか【図1】。また、推考の域を出るものではないが、このような様相の地域への広がりや持続的な展開は、

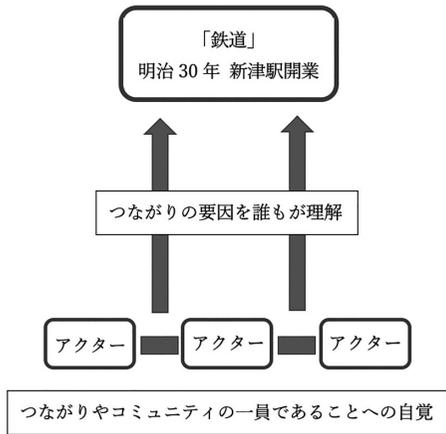


図1 アクターが地域へ愛着を見出す際の地域の在り方のイメージ

たとえ自身が地域づくりに積極的に活動するアクターではなくとも、「鉄道」をキーワードとするエリアの住人としての自覚を感じるのではないかと考えられるのである。

②地域史を活用した地域づくりに、地域のミュージアムがどのような役割をもって関われる可能性があるのかについては、新潟市商店街協同組合連合会理事長の野本氏、新潟市新津鉄道資料館前副館長の水澤氏・現副館長の加藤氏・学芸員の岩野氏の各々の回答から考えてみたい。ミュージアムが地域づくりに関わるきっかけは、前年も含めた新潟市新津鉄道資料館のリニューアル・オープンであったことが認められた。そして、この地の地域づくりにおいて、「鉄道」というキーワードを強調したのは新潟市新津鉄道資料館であったが、このことは金山喜昭氏の「資料館の再生が地域経済にも少なからず影響を及ぼす。そのために「鉄道のまち新津」であるという根拠を示すことが大切である。資料館を再生させることは、その根拠を内外にアピールすることになる」²⁸⁾という指摘のとおり、新潟市新津鉄道資料館において、「新津が鉄道のまち」であるというエビデンスが、学芸員の収集・保管・展示・調査研究という一連の業務によって整えられていることに事端するのであ

る。すなわち、ミュージアムは、地域づくりの根拠やきっかけを提供・強調するという役割での関わりが見られたのである。

また、水澤喜代志氏の「資料館は単体で人を呼ぶのは限界があると思う。エリアで人を呼び込む必要がある。資料館に人を呼び込むのは手段、商店街などの経済的活性化が目的である。行政は、何のためにこの地域にこの施設を置いたのかをもう少し広い視野で見ても良いのではないかと思う。このような観点から、リニューアルの絶対条件は地域との連携であった」というヒアリング調査における回答や「地域の人たちに鉄道資源が文化であり観光素材にもなる地域資源が身近にあることを知ってもらうことが重要（中略）各種鉄道事業には県内外からたくさんの方の来場があり、これが商店街や地域の人たちに地域資源である鉄道の活用と集客効果があるとの意識付けができた」²⁹⁾という見解からも明らかのように、観光も視野に入れ、地域への来訪者を増やすという顕著な意識を持して地域との連携を進めたのである。すなわち、ときには地域主体をサポートし、ときには、ミュージアムが主体となるなど、エリアマネジメント的な思考をもって³⁰⁾、地域の展開に関わったと考えられる。その結果、先に記した、地域への愛着の生成に関係する可能性が見出されるつながりやコミュニティの一員であることへの自覚とその要因をしっかりと理解できる眼差し、とりわけ、要因をしっかりと理解できる眼差しの形成に貢献したと考えられる。

全国各地に入館者の獲得に悩みを抱えるミュージアムが存在する。ミュージアムの種別や収蔵資料、日常業務への支障の問題などにもよろうが、ミュージアムへの入館者増を思考すると同様に、ミュージアムが所在する地域への来訪者増という、所在エリアに人を呼び込むことを意識して地域と連携を進めていくという眼差しは、観光振興という「地域の維持」の解決策の1つに、ミュージアムが有効に機能する可能性の1つであると言えよう。

Mar. 2020

地域史を活用した地域づくりにおける愛着の生成とミュージアムの役割

【謝 辞】

本稿を執筆するにあたり、下記のみなさまに多くをご教示いただきました。ありがとうございます。記して感謝します。(順不同)

新潟市新津鉄道資料館 前副館長 水澤喜代志氏
 新潟市新津鉄道資料館 副館長 加藤裕之氏
 新潟市新津鉄道資料館 学芸員 岩野邦康氏
 新津商店街協同組合連合会 理事長 野本一郎氏
 むらき呉服店 村木政寛氏
 フルーツ&ギフトやまいし 石月勝氏

【付 記】

本研究はJSPS 科研費・課題番号19K20574・課題名「ミュージアムの特性を活かした「観光プログラム」の構築に関する研究」の研究成果の一部である。

注

- 1) 拙稿「地域の振興と博物館」『観光資源としての博物館』, 2016年, 芙蓉書房出版, 176ページ。
- 2) 前掲注1) 177ページ。
- 3) 本稿では、「にいつ」や「新津」など、当該地の地名について平仮名と漢字の表記が混在するが、出典に依拠した結果である。
- 4) 金山喜昭「新潟市新津鉄道資料館を再生する」『法政大学資格課程年報』, 2013年, 法政大学資格課程, 23-38ページ。
- 5) 金山喜昭「鉄道資料館と商店街の連携とその波及効果：新潟市新津鉄道資料館と新津商店街の事例から」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』13巻, 2016年, 法政大学キャリアデザイン学部, 43-59ページ。
- 6) 前掲注4) 34ページ。
- 7) 前掲注5) 43ページ。
- 8) 前掲注5) 57ページ。
- 9) 水澤喜代志「新津鉄道資料館リニューアルとまちなか活性化を結びつける」『運輸と経済』第77巻第1号, 2017年, 一般財団法人運輸調査局, 84-90ページ。
- 10) 前掲注9) 88ページ。
- 11) 本章を記すにあたり、以下を参照した。
 新潟市秋葉区HP「区の概要」
<https://www.city.niigata.lg.jp/smph/akiha/about/gaiyou.html> (2019.11.05アクセス)
- 12) 本章を記すにあたり、以下を参照した。
 ・にいつ鉄道商店街HP「新津商店街の歴史」
<https://www.niitsu.info/history/> (2019.11.05アクセス)
 ・中小企業庁HP「関東地方のがんばる商店街 新津商店街 (新津商店街協同組合連合会) (新潟県新潟市)」

<https://www.chusho.meti.go.jp/keiei/sapoin/monozukuri300sha/shoutengai30/2015/S11.pdf> (2019.11.05アクセス)

- ・前掲注5)
 - ・前掲注9)
- また、商店街関係者へのヒアリング調査は、新津商店街協同組合連合会理事長の野本一郎氏・むらき呉服店の村木政寛氏の2名を対象に実施した。(2019.10.03ヒアリング調査実施)
- 13) 前掲注12)
 にいつ鉄道商店街HP「新津商店街の歴史 <https://www.niitsu.info/history/> (2019.11.05アクセス)
 - 14) 新潟市秋葉区「拠点商業地の位置及び区域」『秋葉区拠点商業活性化推進事業計画第2期～商店街が市民の暮らしを支え、市民が商店街を支える関係を目指して～』, 2016年, 6-7ページ。
 - 15) 前掲注12) 中小企業庁HP「関東地方のがんばる商店街 新津商店街 (新津商店街協同組合連合会) (新潟県新潟市)」
<https://www.chusho.meti.go.jp/keiei/sapoin/monozukuri300sha/shoutengai30/2015/S11.pdf> (2019.11.05アクセス)
 - 16) 本稿で取り上げた取り組みコンテンツについては、前掲注5)及び前掲注9)においてすでに紹介されているものがあり、本稿でも初めて紹介するものではないが、本稿でも触れておく必要があるため、現地における実見調査・ヒアリング調査などをもとに改めて本稿でも取り上げる。(2019.09.06・2019.10.03実見調査・ヒアリング調査実施)
 なお、取り組みコンテンツには、商店街が主体的に取り組んだものと新潟市新津鉄道資料館と連携してなされたものがある。
 - 17) 新津商店街協同組合連合会理事長の野本一郎氏のご教示による。なお、鉄道商店街の際には、「新津」は「にいつ」と平仮名での表記となる。
 - 18) 現地に設置されている説明板の説明文を参照した。
 - 19) 前掲注5) 48ページ。
 - 20) 前掲注9) 89ページ。
 - 21) 前掲注5) 45・47ページ。
 - 22) にいつ特命調査班女子班「新津まつりと本町通り 鉄道アート」『鉄道の街新津 調査報告書 女子旅編』, 2015年, 新津新光商店街協同組合, 3ページ。
 - 23) 山口律子「一小情報ボックスとは」『新潟市・地域と学校パートナーシップ事業』便りやさしさに感謝』, 2017年, 新津第一小学校。
 - 24) これらの情報は、複数のパンフレット類に掲載されている。なお、すべての実物を実見した訳ではないため、現在は販売・提供されていないものがある可能性がある。
 - 25) 前掲注22)

26) この(カッコ)の文章は、本稿を記すにあたり筆者が加筆した。

27) 本章を記すにあたり、以下を参照した。

なお、入館者数については、ヒアリング調査の際に口頭でご教示いただいたデータである。

・株式会社丹青研究所「事例10新潟市新津鉄道資料館 街まるごとイメージ作り—地域活性と資料館活動充実の好循環—」『美術館・博物館の特徴的な取組に関する調査事業』, 2017年, 文化庁, 26-27ページ。

・『新潟市新津鉄道資料館パンフレット』

・新津鉄道資料HP <http://www.ncnrm.com> (2019.11.05 アクセス)

・前掲注9)

また、資料館関係者へのヒアリング調査は、新潟市新津鉄道資料館前副館長の水澤喜代志氏・新潟市新津鉄道資料館副館長の加藤裕之氏・新潟市新津鉄道資料館学芸員の岩野邦康氏の3名を対象に実施した。なお、副館長は他部署からの異動である。(2019.09.06 加藤氏・岩野氏へのヒアリング調査実施・2019.10.03 水澤氏へのヒアリング調査実

施)

28) 前掲注6)

29) 前掲注9) 89ページ。

30) エリアマネジメントとは「地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上させるための、住民・事業主・地権者等による主体的な取り組み」(「エリアマネジメントの定義」『エリアマネジメント推進マニュアル』, 2008年, 交通省土地・水資源局, 9ページ)や「特定のエリアを単位に、民間が主体となって、まちづくりや地域経営(マネジメント)を積極的に行おうという取組み」(内閣官房・内閣府 総合サイト「エリアマネジメント活動の推進」『みんなで育てる地域のチカラ 地方創生』 <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/about/areamanagement/index.html> (2019.11.05 アクセス))などと定義されるものであり、主体は行政でないことが前提である。したがって、本稿ではエリアマネジメントそのものではないという観点から「エリアマネジメント的」という表現にしている。

(2019年11月22日掲載決定)